

n°48

Hot from PARIS

いまパリで起きているコト

Director of Paris Office

パリ支局長

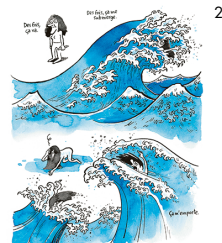
高田 昌枝

(テロを生き延びた女性風刺画家が伝える、生きる力。)

「Je Suis Charlie(私はシャルリー)」を覚えているだろうか。2015年1月7日、ムハンマドの風刺画などでイスラム過激派の脅迫を受けていたフランスの風刺新聞「シャルリー・エブド」が襲撃され、12人が死亡した。この事件をきっかけに、風刺画をめぐるさまざまな論議とともに、表現の自由を支持する運動が世界に広まった。



それから6年。メトロのホームに2枚組の巨大ポスターが登場した。大波の下で、子どもを抱いてうずくまる女性のイラストには「Oui, ça va aller. Vivre, c'est indispensable.(大丈夫。生きなくては)」の言葉が添えられている。隣は、このイラストが収められた書籍の真っ青な表紙だ。「シャルリー・エブド」襲撃事件を生き延びた風刺漫画家ココが上梓した、350ページに及ぶバンド・デシネ『Dessiner



Encore(もっと、描き続ける)』が、大きな反響を呼んでいる。

編集会議を早退したところでテロリストと鉢合わせし、銃で脅され案内させられたココは、自責の念にさいなまれ続けた。事件の裁判で証言台に立つことになった彼女は、この日の出来事を語るためにデッサンを描き始める。そこから、この本が生まれた。

冒頭12ページにわたって描かれた、大波に翻弄され、もがき続ける自分自身。どんな時にもこちらを見つめる、目出し帽をかぶったテロリストの影。そんなトラウマを描き出すイラストには、心を揺さぶる力強さがある。一方、心理セラピーの形で語られる事件当日やその後の日々の描写は実に細やかで、月日とともに忘れ去られようとする集団的記憶を、読み手にしっかりと蘇らせる。



『Dessiner Encore』
Coco 著
Les Arènes BD 刊
28ユーロ

ブルーの色使いが印象的なこの本について、ココはこう語る。

「青は冷静さと安らぎの色。自分の中の怒りや憤慨は新聞で表現するために取っておき、この本では未来を、生きることを語りたかった。どんなに辛いことがあっても、どうやって命にしがみつき、生きていくかを」

この本が目されるのは、テロを語るからではない。死の恐怖とサバイバーズ・ギルトを抱えながら、描き続け、生きていく姿。そのイラストの力が、読み手それぞれの心に共鳴し、前進する勇気を与えてくれるからなのだ。

1.メトロのホームのポスター。本の表紙(右)の紙と鉛筆が「描き続ける」思いを象徴する。
2.波に翻弄されるココ自身を描いた冒頭からの12ページ。「大丈夫な時もある」「溺れてしまうこともある」「持って行かれてしまうことも」 3.「シャルリー・エブド」に案内しろ」と銃を突きつけられて。4.事件直前の編集会議。「会議はほぼ終わったから、荷物をまとめた……」

